



正教会入門

東方キリスト教の
歴史・信仰・礼拝

7月25日発売

ティモシー・ウエア著／松島雄一「監訳」(まつしま氏は大阪ハリストス正教会司祭)

正教会の歴史と信仰を知らずにキリスト教の十全な理解はありえない。

著者ウエアは1934年、英国生まれ。オックスフォードで古典と神学を専攻。58年、正教会に改宗。66年、司祭に叙せられた。著書多数。

本書は1963年の初版以来、正教会への入門書として不動の地位を保ち続けてきた。この間、何度も改訂を加えてきたが、この邦訳の底本である2015年の第3版では、エキユメニズム、サクラメント、自由意志、煉獄、また多様な正教会間の関係について、大幅な増補改訂を施している。歴史から神学、実践にまで及ぶ深く正確な解説により、正教会、ひいてはキリスト教全体への理解が深まる。

◆A5判・400頁・本体4000円

■関連書

ビザンティン神学

歴史的傾向と教理的主題

メイエンドルフ著／鈴木浩訳

◆本体4700円

〔目次より〕

第I部 歴史

第1章 始まり

第2章 ビザンティン時代(Ⅰ)

第3章 ビザンティン時代(Ⅱ)——大分裂

第4章 スラブの改宗

第5章 イスラム支配下の教会

第6章 モスクワとペテルブルグ

第7章 二〇世紀(Ⅰ)——ギリシャとアラブ

第8章 二〇世紀(Ⅱ)——正教と戦闘的無神論者

第9章 二〇世紀(Ⅲ)——離散と伝道

第II部 信仰と礼拝

第10章 聖伝——正教信仰の源

第11章 神と人間

第12章 神の教会

第13章 正教の奉神礼(Ⅰ)——この世の天国

第14章 正教の奉神礼(Ⅱ)——機密

第15章 正教の奉神礼(Ⅲ)——祭日、斎、私祈祷

第16章 正教会と他のキリスト教会との再合同

井上良雄著

キリスト教講話集Ⅲ

全4冊完結！

キリスト者の標識

6月に既刊

キリスト教講話集Ⅳ

待ちつつつつ急ぎつつ

7月21日発売



戦争末期にキリスト者となり、戦後は東京神学大学で教鞭を執りつつバルト「和解論」全巻を訳出、また日本基督教団の社会委員長を歴任するなど、信徒として教会に仕えた井上。没後発見された説教ノートから説教・講演を、戒能信生牧師が全4巻に集成。第Ⅳ巻には60年代から90年代までの11編を収録。至純な信仰をもって生きた「証人としてのキリスト者」の真実な言葉。

【Ⅳの目次より】高見順氏の死について／神学校における人間形成／受洗者・入会者・卒業生への言葉／人生読本 虚無・死・ユーマア／私の理想とする人／戦争責任の問題／今日のキリスト告白／バルトの教会論／K・バルトにおける教会と国家／証人としてのキリスト者／待ちつつ急ぎつつ

◆新書判・288頁・本体1700円

既刊 大いなる招待

キリスト教講話集Ⅰ

◆本体1700円

既刊 エデンからゴルゴタまで

キリスト教講話集Ⅱ

◆本体1700円

●名著復活

ローランド・ベイントン著／出村彰訳

宗教改革史

7月21日発売

宗教改革はなぜ起こったのか。どのような経緯を経て展開していったのか。世界を根拠から変えたこの複雑な運動を、16世紀の歴史的・社会的条件に広く目配りしながら、改革者たちの信仰と思想に深く内在し、その全容をコンパクトにまとめた通史。

長らく品切だった名著・名訳を、読みやすく改版し、復刊する。

【宗教改革 500年記念復刊】

◆四六判・364頁・本体2800円

フスト・ゴンサレス著／石田学訳 キリスト教思想史Ⅱ

教会史家として名高い著者の主著。第2巻は古代末期から中世末期にいたる千年あまりの間に、キリスト教思想がいかなる変化を遂げていったかを、単なる思想的な運動としてではなく、社会的・経済的文脈との関連に注目しながら生き生きと叙述する。

◆A5判・予価5000円

宮平望著

ジョン・マクマレー研究

マクマレー (1891-1976) はスコットランド出身のキリスト教哲学者。第一次大戦への従軍体験の後、共産主義の問題と取り組み、関係としての人間に着目した深い人間論に基づく共同体思想を形成した。日本人による初のモノグラフ。

◆A5判・予価2400円

新教コイノニア34

改革者たちの500年 (仮題)

月刊誌『福音と世界』2017年1月号から6月号まで行われた宗教改革500年を記念する連続特集を、新たな寄稿も加えて単行本化。宗教改革が目指したのももたらしたのも、双方を見つめながら、多様な視点から現代の課題を考える。

◆A5判・予価2000円

●6月に出た本と雑誌

ポップカルチャーを哲学する
高橋優子著
福音の文脈化に向けて

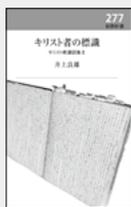


アニメやゲーム等、現代日本のポップカルチャーに溢れるキリスト教的象徴を丁寧に読み解き、若者たちの魂に最も近い「福音」の形を探った話題作。

◆四六判・本体2000円

キリスト教講話集Ⅲ

井上良雄著



敗戦直後から60年台までの講話12編を収録。バルトに拠りつつ世との連帯を求めて教会に仕え続けた信徒神学者の面目躍如とする至純な言葉。

◆新書判・本体1700円

福音と世界

7月号 特集 改革しつつけるアジアの教会

◆税込635円

寄稿者・山本俊正、宇井志緒利、志村真、藤原佐和子、ナゲネ、松谷暉介／呉寿恵／高井ヘラー由紀、吉松純、佐藤優、中村うさぎ、内田樹、芦名定道、辻学、月本昭男、望月麻生ほか

●先日、友人たちとキリスト教について話す集まりをもちました。テーマとなつたのは「キリスト教がたくさんの問題を抱えているのは明白なのに、なぜそこに留まりつづけるのか」です。たびたび人から問われ、また自分でも反問してきたこの難題について、いっしょに考えてみようというのがその狙いでした。私自身の感触では、集まりは成功だったように思います。キリスト教の問題点を内側から変えていこうとする人や、共同体としてのキリスト教会に思いを寄せる人……それぞれが血肉がかよった言葉が交差するさまに、仲間とこの場をもてたこと自体が、先の問いへのひとつの答えになっているのかもしれないと思われました。

●とはいえ、反省点もひとつ。参加者にはキリスト教になじみのない人もいたのですが、その人からの感想は「難しかったです……」。友人とは、「結局自分たちは、キリスト教の内輪の言葉で話すことから抜けさせていないのかもしれない」と顔を見合わせました。どんな言葉づかいが必要なのか、これは雑誌や書籍の編集でも、いつも突き当たる課題です。信仰や知識の有無といった垣根を越えて、より多くの人に受け入れられる言葉を心がけたいのですが、そのために言いたいこと

をないがしろにしてしまつては元も子もありません。ふたつを両立できてこそ真に洗練された言葉なのだとしたら、そこまでの道のりはまだまだ遠いようです。

(堀)

●6月に出た井上良雄先生の『キリスト者の標識』を、先生の肉声を思い出すような気持ちでゆっくり読み直しています。冒頭の「教会と文化」という1948年の講話は、第一コリント書1章の「ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシア人は知恵を求む」を引き、「私も人間の文化の姿はこの二つの句によつて余すところなく規定されている」と述べます。一切を理性の下に我が物としようとする行き方と言つていいかもしれません。これに対しパウロは「されど我らは十字架に釘けられ給ひしキリストを宣傳ふ」と続けます。ここにあるのは文化に対する妥協なき否定でしょうか。先生は、教会の宣教の第一の声は確かに文化への裁きだ、しかしそれは決して反文化主義ではないし、文化に対する最後の言葉でもないとし、「恵みの御言葉を聞いて、それに感謝し、それを畏れる文化」、「そのような徴としての文化」があると述べます。では、それは現代ではどのような文化か、小社はどう貢献できるのか考えこみます。(小林)

福音と世界

2017年
8

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料(送料共)8460円

特集・象徴天皇制・国家・キリスト教

「非人」とされたキリストと天皇

象徴から人間へ

上村 静

象徴天皇制下におけるキリスト教の役割

河西秀哉

再びの天皇代替わりの時に考える

教会はキリスト者は天皇制にどのように立ち向かつてきたか?

中川信明

「家族教会観」批判にむけての試論

天皇制・家族主義・教会

堀江有里

存続した国家神道と教育勅語の廃止問題

島蘭 進

日本基督教団における軍用機献納運動

森田喜基

【連載より】

- ◆ はじめての台湾キリスト教史 5……高井ヘラー由紀
- ◆ みことば散歩 8……望月麻生
- ◆ 聖書とわたし 18……柳 美里
- ◆ アメリカの神学と教会のいま 10……吉松 純
- ◆ 現代神学の冒険 11……芦名定道
- ◆ 新約釈義 第一テモテ書 18……辻 学
- ◆ レヴィナスの時間論 29……内田 樹
- ◆ 詩篇の思想と信仰 147……月本昭男